

このリノベーションが住宅の未来を変える。

応募ハガキ付き!

# BRUTUS

# 建築。約束



建築家10組が

あなたの家を

リノベーション

してくれま

増田信吾 + 大坪克巨

403architecture [dajiba]

藤田雄介 / 島田陽

miCo. / 名和晃平

長坂常 / 田根剛

藤森照信 / アトリエ・ワン

# GOOD RENOVATIONS



増田信吾+大坪克亘

1



403architecture [dajiba]

2



藤田雄介

3



島田 陽

4



miCo.

5



名和晃平

6



長坂 常

7



田根 剛

8



藤森照信

9



アトリエ・ワン

10

## 応募要項

所定の応募用紙に必要事項をお書き込みいただき、2015年10月31日(当日消印有効)までにご郵送ください。エントリー料金は切手の120円です。各建築家と協議の上、可能性のある方には11月末日までにこちらからご連絡いたします。

### 「約束建築」応募の条件

- 応募できるのは、一戸建て、集合住宅を問わず、リノベーション可能な自己所有住宅物件のみになります。店舗やオフィスの応募は受け付けられません。
- 予算を明確にご提示ください。
- 応募できる建築家は1組のみになります。同一人(または同一の物件)で複数組の建築家に応募があった場合は、応募は無効とさせていただきます。
- 専用ハガキでの応募のみを受け付けます。コピー、別形態での応募は受け付けません。
- 選考に関するお問い合わせには一切応じられませんのでご了承ください。

「約束建築」におけるブルータス編集部の役割は、応募選定に関して各建築家と協議することのみです。最終的な決定は各建築家が行います。また、諸般の事情により契約が成立しないことも十分にあり得ます。選定後、建築家と施主との間の契約や実質的な作業に関しては、ブルータス編集部は一切関わりません。

ハガキに記入いただいた個人情報は、ブルータス編集部と建築家のみが保有し、今回の特集とそれにつながる企画のみに使用し、第三者に譲渡または交換することは決していたしません。

実際に「約束建築」が実現の運びになった場合、応募者には、施工の過程、竣工時などを含め、ブルータス編集部が独占して取材することを事前に許可していただきます。



ミラノ、ニューヨーク、レバノン、香港など世界各地でプロジェクトが進行中。日本でも10件以上の仕事が進み、月1回程度のペースで帰国する。「だから日本での打ち合わせも問題ありません」

リノベーションの本場パリから、  
時間と空間をつなぐ住宅を提案します。



パリを拠点に活動する田根剛は、30代にして世界的なプロジェクトで実績を挙げている建築界のホープ。来年度完成するエストニア国立博物館はじめ、考古学的なアプローチを通して、大きなスケールで時間と空間を捉えた建築を手がける。

——大型の公共施設からテンポラリーな展示会まで多様な仕事をしていますが、その中でリノベーションという行為をどう考えていますか？

田根剛 リノベーションと建築を分けるのは、近代建築以降の考え方なんです。昔から建築は、付け足したり形を変えたりするのが当たり前。パリのノートルダム大聖堂も、戦争での破壊などを経て何度も建て直されています。建築は本来そういうもので、ある場所で時代ごとの形を取りながら歴史を継承していく。それが近代になって、建築とはゼロから新しく建てることで、古い建築を直すのはリノベーションとして区別されるようになりました。でも僕は、過去にあったものを未来につなげるのも建築の重要な役割だと考えています。——それでは、いろいろな建物や空間を設計する中で、住宅をどういうものと捉えていますか？

田根 ほかの仕事との大きな違いは、1対1の勝負だということ。クライアントと向かい合い、相手の人生や考え方をすべてを受け入れ、それに対してこちらも意見を言う。その関係がダイレクトなので、すごく体力を使いますね。公共建築のクライアントが、一緒に同じ方向を見て、同じビジョンに向かっている関係なのとは対照的です。

——住宅の設計では、こんなタイプの施主の方が仕事しやすいということはありませんか？

田根 基本的に対話を通じて造るものなので、住む場所への思いが強ければ強いほど、こちらも応えがいがあります。その方が建築が生き生きすると思う。ただし設計は、こちらが提案するコンセプトを理解してもらうのが前提です。あくまで共同作業だから、コンセプト抜きに好き嫌いと言われると進められません。逆にコンセプトを理解し

たうえでなら、たくさんの方をリクエストされる方がうれしい。そこで「こうでなければいけない」ということは僕にはないんです。——リノベーションの根本になるコンセプトは、どうやって導き出していきますか？

田根 最初にするのは考古学のような発掘作業です。土地の歴史、建物の記憶、それらが意味することについてリサーチを重ね、どう形にするかを考えます。僕が設計した住宅「A HOUSE FOR OSO」は、地面を掘ると縄文、弥生、古墳といった時代の土器が出る場所でした。そんな歴史や時



profile

1979年東京都生まれ。デンマークとイギリスの建築事務所を経て、2006年にDGT（ドレル・ゴットメ・田根／アーキテクト）を設立。ダン・ドレル、リノ・ゴットメと共にパリを拠点に活動する。

間の経過を反映させると、その場所にしかできない建築になります。つまり過去を掘り下げることで、未来が立ち上がっていく。リサーチは基礎トレーニングのようなもので、謙虚に調べるプロセスが完成したものの強度を高めます。それをせずにクライアントの意向を聞いてすぐにデザインするのは少し乱暴なやり方だという気がします。——すると今回も、歴史のある物件の方がリノベーションのしがいがあるということ？

田根 古い建物ほど面白いというのはありますね。伝統的な日本家屋にも興味を持っています。マン

ションでもいいのですが、日本の最近のマンションは空調などがすべて管理されていて自由度がなくて、表面的な部分しか手を入れられないことがあります。その点では古い団地の方が可能性があるかもしれません。建築というところの人は空間を思い浮かべますが、実際は、時間と空間をどう結びつけていくかだと思います。

——数年前からパリに住んでいることも、リノベーションの考え方に影響していますか？

田根 はい。フランス人は建築に対して保守的で、そこは悪い意味に受け取られがちですが、彼らは自分が生活する環境を大事にして、その歴史や場所に学ぼうとするんです。そのうえで、今という時代に合う使い方を考える。だから古いものと新しいものがうまく共存しています。日本では、古い建築を残すというと、美術品のように手を触れずに守ろうとすることが多いように思います。

——住宅のリノベーションで、もしもシンズンのインスタレーション「LIGHT IS TIME」のような空間を求められたらどうしますか？

田根 やめた方がいいと言います（笑）。ただ僕にとっては、インスタレーションも考え方は建築と同じです。東京の「LIGHT IS TIME」は会期中に7万2000人が来場したけれど、それを5人家族が暮らす時間と空間に当てはめると約40年間使いつける計算になる。長い時間軸の中でどう使ってもらい、何を感じることができるか、なんです。家には季節があり、経年の変化があり、徐々に魅力が増す方がいい。展覧会やインスタレーションは、そんな建築をギュッと凝縮したものだと言えます。

——予想もできない空間が出来上がりそうですね。田根 僕自身、頭の中のイメージを形にするより、自分でも考えてなかったものに出会いたい。「あ、こんなのが出てきた」という方が好きですね。環境として成立させることを考えているので、目に見える形にはこだわりがない。場所の記憶を引き継ぎたいと思っています。

田根 剛 / DGT.

Tsuyoshi Tane



Image 061

### エストニア国立博物館

その他

エストニアの国家的な大プロジェクト。この施設のコンペでの勝利を機に、田根は独立して(DGT)を設立した。リーマン・ショックなどで一時は実現が危ぶまれたが、来年の完成を目指し急ピッチで建設が進む。●所在地／エストニア・タルトゥ●構造／RC造+鉄骨造●規模／地上2階・地下1階●設計期間／2006年1月～2009年10月●施工期間／2013年3月～●敷地面積／411,212㎡●建築面積／15,163㎡●延床面積／34,000㎡



photo / Tanji Shimura

リサーチにかける十分な時間と手間が、かけがえない体験をもたらす。

田根剛が在籍する〈DGT〉にとって最大のプロジェクトが、エストニア国立博物館だ。その特徴は、敷地の一端が近隣の旧ソ連軍の滑走路に接していること。今後の国の抛りどころになる施設を、占領時代の負の遺産と結びつける案に、国内では異論もあつたという。あえてこの提案で人々を納得させた事実が、過去を掘り下げて未来につなげるという田根の信念の強さを裏づけている。

展示会やインスタレーションでは、場所の記憶を探る代わりに、展示のテーマを綿密にリサーチする。シチズンのインスタレーション「LIGHT IS TIME」は時間について調べ、その光との関係を空間で表現して絶賛された。古代人の時間の感覚や、時間の物理的な意義など、そのリサーチはきわめて多方面に及んだ。

リノベーションでも、環境や建物にまつわる物事を徹底的に調べる姿勢は変わらない。この作業と、そこから導いたコンセプトに基づいて施主とやりとりするプロセスを考えると、田根は「1年後に完成という話だと難しい」という。だからこそ結果として完成する建築は、彼ならではの広い視野で空間と時間を結びつけたものになるだろう。数十年後に振り返った時、実際に住んだ歲月以上のものであったらしてくれたことに気づく。そんな場所が生まれそうだ。





上/地盤を掘って出た残土も外壁に使い、建物に通気性を持たせた。1階に居間などを配置し、板張りの2階は寝室。下/キッチンやバスルームを配置した。

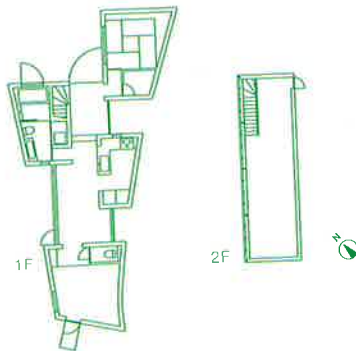


photo / Takumi Ota

## A HOUSE for OISO

新築

施主の希望は「100年後まで残る家」。5,000年前から人が住んだ跡が残る大塚の歴史、住文化、風土を調べ上げ、堅穴式住居や高床式住居といった近代以前の日本の多様な家の特徴を組み合わせた。●所在地/神奈川県大磯町●家族構成/夫婦+子供3人●構造/木造●規模/地上2階●設計期間/2014年1月~8月●施工期間/2014年9月~2015年4月●敷地面積/168.75㎡●建築面積/80.92㎡●延床面積/119.73㎡





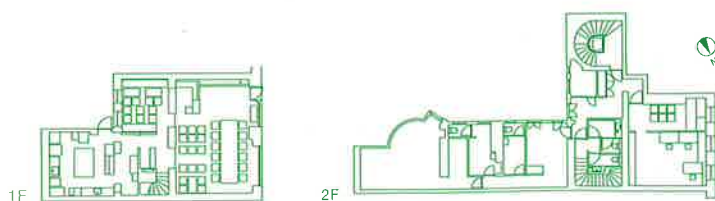
上／角が丸い漆喰の壁面で日本の「折り合い」の精神を表現。フレンチオークやトラバーチンなどの素材で和の空間を目指した。テーブルは羊羹がモチーフ。下／暖簾は35年前のオープン時からのものを継承。



photo/Takui Shimura

とらやパリ店

その他



日本を代表する和菓子の老舗、とらやの唯一の海外店舗であるパリ店は1980年にオープン。その改装プロジェクトは現時点での〈DGT〉の最新作だ。日本文化の発信に力を入れ、現地の素材を使って和菓子を作るような革新的姿勢があることを、空間全体で伝えようという意図している。●所在地／フランス・パリ●構造／石造●規模／地上2階●設計期間／2014年3月～2015年1月●施工期間／2015年2月～6月●延床面積／229.3㎡





photo/Takui Shimamura



右上／2色を用いた会場。右下／作風によって生涯を分割し、各展示室の広さはその年数に対応。左／圧巻のエントランス。

『北斎展グランパレ』

その他

パリのグランパレで開催され、世界各国への巡回が予定される北斎展の会場構成。〈DGT〉はコンペで選ばれた。会場の通常の壁面をヨモギ色に、作品のある壁をベンガラ色にして、江戸文化のハレとケを対応させている。作風が年齢とともに深化するにつれて、その2色の深みが増していく。●開催地／フランス・パリ●構造／軽量鉄骨造●規模／地上2階●設計期間／2013年12月～2014年8月●施工期間／2014年9月●延床面積／1,200㎡



photo/Takui Shimamura

「LIGHT is TIME」はパーゼル、ミラノ、東京で開催。体験したことのないような光が会場に満ち溢れ、来場者を包んだ。

「LIGHT is TIME」

その他

時計ブランド、シチズンのためのインスタレーションで、地板と呼ばれる腕時計の基板80,000個を使用。光の粒が空中に漂うような景色を作り出し、栄誉あるミラノデザインアワードを受賞するなど高い評価を得た。同年開催の東京での凱旋展は、15日間で72,000人という記録的な集客を達成。●開催地／イタリア・ミラノ●構造／鉄骨造●規模／地上1階●設計期間／2013年10月～2014年2月●施工期間／2014年4月●延床面積／423㎡